

NOISEMAKER



“自分が本当にただ単に良いな、カッコいいなって思うものを作る” ジャンルを超えた境地を切り拓く、NOISEMAKERのニュー・ミニ・アルバムが完成!

AG (Vo) HIDE (Gt) YU-KI (Ba) UTA (Dr)
インタビュー：米沢 彰

—ニュー・ミニ・アルバム「MAZE」の完成おめでとうございます。タイトルの“MAZE”には迷宮とか迷路といった意味がありますが、このタイトルをつけた意味や由来などを教えてくださいませんか？

AG: 1曲ごとに伝えている内容は違うんですけど、アルバムのタイトルを何にしようかになって思ったときに、共通しているのが人だったんです。人そのものだったり、人間社会だったり、人と人の関わり合いとか、結局、内容を見ていったら“自分で迷いながらも答えを見つけていく人の姿”が共通しているなって。それで、人の住んでる世界を迷路にたとえて“迷いながらも自分たちで答えを見つけてい”という意味でタイトルをつけました。

—フル・アルバムとなった前作「DOUBLE COLOR SHEEP」のリリースから10ヶ月でのリリースとなりましたが、今作はいつ頃から制作に入ったのでしょうか？

AG: ネタはちょくちょく作ってたんですけど、ほんとガチっと作り始めたのって3ヶ月前くらいですね。

HIDE: レコーディングの1ヶ月前とか、2ヶ月前とかでしたね。

—そうすると、たいたい4月とかそのくらいの時期からですかね。前作のリリース直後には全22本のリリース・ツアーを回り、更に様々なイベントにも出演されていましたけど、

AG: そうですね。

—一体、いつの間に作ったんですか(笑)？

一同: (笑)

UTA: しかも、その途中でコラボの曲も作ってますしね。

HIDE: ほんと、いつの間に作ったんでしょうね。

AG: 結構飛び回ってたんで。ハードといえはハードでしたかね。

—かなりの数のライブをやられますが、そのときの反応などが制作の中に反映されているってことはありますか？

AG: ライブを通して自分たちの音楽をより客観的に見られるようになるかもしれないですね。対バンとか色んなバンドとやって自分たちの音楽を再確認できるし、自分たちの表現できる音楽として“自分たちにしかできないこういうことをやりたい”っていう

のも、このアルバムに反映されてるかもしれないです。リード・トラックの「REASON」は盛り上げたいこと、やりたいことをそのままやって感じて、そういう意味では、ライブをやってそういうのが見えてきたんじゃないかなって思います。

—NOISEMAKERらしい耳に残るヴォーカル・ラインとラウドなサウンドが気持ち良い1枚に仕上がっていますね。こんな1枚にしたいとか具体的なイメージを持って制作に入りましたか？

AG: こんな1枚にしたいというのは、作るときにはなかったですね。

HIDE: とりあえずいっぱい曲を作って、似たような曲が被らないようにバランスも考えて……。

AG: 1曲1曲に力を入れていくスタンスなので、でき上がったときにこういう曲が並んだっていう感じがですね。

—じゃあその迷路のイメージも、でき上がってから初めて出てきたってことですか？

AG: そうですね。歌詞の内容の共通点を考えてときに、それが出てきたというか……。1つのコンセプトがあって作ったという訳じゃなくて、1曲1曲作っていった結果ですね。

—どの曲もすごくサビのフックが効いていて、そこがNOISEMAKERの最強の武器の1つだなと思っているんですけど、メロディっていつもどのようにして作っているんですか？

AG: 良いメロディだなって思うまで考えるだけですね。それに尽きるというか。

—ボツにすることも多いですか？

AG: 全然あります。俺が良いと思って持っていたらメンバーのみんなの顔がバツしないうとか、“なんだ、これ全然良くないんだ”とかざらにあるし。

—AGさんがメロディを作ってるのでしょうか。

AG: ほとんどそうですね。

—制作の流れってどのようにして進められてる感じですか？

AG: HIDEと2人で筈って作ってますね。2人であだこたう言って作ってるんですけど、

—NOISEMAKERはリズム感が独特で、小節やメロディを超えたノリをドラムが担ったり、ベースが担ったり、ギターが担ったりとかかなり自在にリズム感を作り出しているなと感じるのですが、この独特の展開はどのようにして作りこんでいっているのですか？

もっともっと良い音楽同士混ざり合いたい そしたらもっともっと面白いものが生まれてくると思う

AG: とりあえず、自分たちが本当にただ単に良いな、カッコいいなって思うものを作るっていうことですね。

—では感覚のみっていう感じですか？

AG: 感覚メーカーだから。

一同: (笑)

HIDE: でも、前とはちょっと変わってきていて、こういうアプローチはどうかとか、こういう風にしたら面白いかなってのは考えてますね。あと、メロディとメロディのリズムに合わせたりとか、逆にメロディにメロディを合わせたりとか、音に全部意味があるのて1つでもズレると気になる。それは凄く意識してますね。

—ちなみに皆さん出身は札幌ですか？

AG: 出身はバラバラですね。苫小牧とか歌志内とか。

UTA: 稚内のほうです僕は。

—じゃあ皆さん道内ではあるんですね。

AG: そうですね。

—曲名で「DRIFTING CLOUDS」って名前が付いていたりとか、歌詞の中でも広いところをイメージさせるような内容が多く、北海道出身であることが作品全体に反映されているように感じます。ご自身ではいかがですか？

AG: 自分ではそういう気はしないような……。でも、全然そんなことないと思います。もしかしたら精神的にそういうこともあるかもしれないですね。

—歌詞とか曲名ってどういうときに浮かんでくるものなんですか？

AG: それも全然決まってなくて、普段気になることとか“あ”と思ったことをメモってるんですけど、出てきた言葉とか、自然に自分が人と接したりその辺で歩いてたりとか、感じたこととかを書いてますね。もしかしたら北海道という土地でそういうことを感じたのかもしれないですね。

—それは、制作期間問わず、普段からメモっているのですか？

AG: そうですね。例えば、友達と話していて友達の発した言葉が自分の中で響いたりとか、何かが通って見えたりとか、そういうのを歌詞にしていますね。

—ちなみに、「サウンドの雰囲気とかメロディが日本語調にすごく合うんじゃないかって勝手に思っているんですけど、日本語調への挑戦を考えたことはありますか？

AG: やってみたいというのは思うんですけど、それも自然にできたら良いかなって思っていますね。今の段階では、なかなか想像できない状態です。でも挑戦したいという気持ちはあります。

—今作も全編英語ですが、洋楽に対する意識とか思いはやはり強いのですか？

AG: 洋楽に対する思いはすごくあります。バンドを始めて“こうなりたい”って思ったのは洋楽の影響が強いので、昔のLINKIN PARKとかLIMP BIZKITとか、RAGE AGAINST THE MACHINEとかINCUBUSとかの野外のフェスだったり、あとWarped Tourとかそういうのを見て、ここでやりたいなと思いましたね。そういうふうに思ってた聴いてたら自分たちもそういう音楽になってたというか。意識というよりも、自分たちとしては自然なことで、自然に好きなものを聴いて、自分たちで音楽をやったら自然とそういう音楽になるって思う感じがします。

UTA: 洋楽についているLIMP BIZKITが凄く好きだったものもあるし、INCUBUSとかそういうグループなんか感じの好きだったっていうものもあるし、そういうのが叩きたいなっていう憧れからですね。

AG: LIMP似てるよね。

UTA: 体型だけでしょ(笑)。

一同: (笑)

HIDE: RAGE AGAINST THE MACHINEだったりで育ったっていうものもあるし、そこばかり聴いてたんですけど、今は全然日本の曲も聴くし、邦楽だからとか洋楽だからっていうのは今は全然なくて、ロックだけじゃなくて、テクも聴くし、エレクトロも聴くし、最近幅広くなりすぎてちょっと困ってるぐらいですね。

AG: 良いものがありますよね。

HIDE: 昔は頑固すぎて、これしかやらないとか、速い曲はやらないとかありましたね。最近はそうじゃないから困っちゃってるのも正直あります。

—やりたいものがいろいろ出てくるってことですか？

HIDE: 前作とか今作でも四つ打ちの曲を作ったりとか……。昔は四つ打ち大嫌いだったんですけど、やってみてハマったりするから、そごも広くなってますね。好きなものも増えてるしね。少女時代もいいし、Perfumeもかっこいい。

—それは、自分が変わってきたっていうことでしょうか？

HIDE: いろいろやっていて、今まで気にならなかったことが“実はすごいことしてるんだ”って思うようになりましたね。今まで気づかなかったことが気になってくるんですよ。昔は先入観で、“洋楽=すごい”みたいなものもありましたけど、邦楽もすごいことをしているし、いい音もメロディもあるし……。気付けるようになってきた気がしますね。

YU-KI: 僕も洋楽に特別こだわりがあるってわけではなくて、カッコいい音楽はカッコいいと思うし、4人の個々の好きなものがNOISEMAKERとして表現されるのがいいかなって。もちろん、好きなバンドとしては洋楽で影響を受けているものは多いですけど、こだわりはないかもしれないです。

—原点ではあるけれども、捉われるものではない感じですね。

AG: なんか近い感じですかね。俺が感じるのは、今の若い子もそうだし、俺もそうなんですけど、昔と比べたら海外と日本の距離が近くなった気がするんですよ。インターネットとかメディアとかで普通にそういう音楽に触れる機会が多くなっているから、ちょっと近いものの音楽を聴くっていうか、自然と分け隔てなく聴けるんじゃないかなと思いますね。

—AGさんを中心に“ジャンルを超えたい”ということをはっきりと発信されていますが、具体的に最近の動きとしてジャンルを超えていっていることって何かありますか？

AG: それこそCIRCLE OF US (NOISEMAKER主催のイベント) だね。今回の自分たちのフェスとか、色んな仲の良いバンドや初めてやるバンドと北海道でもやって、東京でもやって、サーキットでやって、それを音楽だけじゃなくて、その先は文化とか人種とかそういうの関係なしの“超えたいもの”をやっていく。今回はその第1歩だったんですけど、俺らからしたらすごい重たいバンドもいれば、メロコアとかパンクもいるし、これかもっともっと、そしてJ-POPと一緒にやるのも全然ありだと思うし、今後もいいなと思うバンドとやりたいなと思います。

—ジャンルを超えたいっていう思いの原点ってあったりかしします？

AG: そもそも壁はないんですけど、超えたいというよりもっともっと良い音楽同士混ざり合いたいというか、そしたらもっともっと面白いものが生まれてくると思うし。結構そろってみんながやろうとしていることだと思うし、やってきたことでもあると思うので、それを更に飛び越えていけたらなと。

HIDE: ジャンルを超えてって難しいね。

—そうですね。

AG: でも、海外の好きなバンドとかは自然とやってるし、例えばLINKIN PARKもそうだし。そういう自由な、もしかしたら若い子たちも“あ、こんなことできるんだ”とか“していいんだ”とか、見たときに思ってもらえれば、“もしかしたらこの先もっともっすごいことが起こるかもしれない”と思いますね。

—最後に激ロックの読者に向けてお人づつメッセージをいただいてもよろしいですか？

AG: 今僕らが表現できることをすべて詰め込んだアルバムなんですけど、ジャンルがどうだとか、レーベルとか出身とか、そんなの置いて、とりあえず純粋に聴いてアルバムを楽しんでほしい。音楽を楽しんでほしいです。

UTA: ライブに遊びに来てみんなでNOISEMAKERのエクスタシーを感じてください。

HIDE: 今回の「MAZE」をちゃんと手に取って、英語の歌詞だからちゃんと日本語も読んで、ジャケットの意味があるしタイトルにも意味があるから、ODを聴いてライブと一緒に体験するとまた違った見え方がすると思うのでぜひ手に取ってください。

YU-KI: 毎回言ってるかもしれないんですけど、他にはない1枚ができたと思うので、すごく楽しめる作品が出来たので、本当に同じこと言っちゃいますけど、ライブと一緒に楽しめたらなと思います。



NOISEMAKER
MAZE
2014.8.20 ON SALE!!

北海道出身の4人組ラウドロック・バンドにによる39曲目のミニ・アルバム、その確かな実力と、エネルギー溢るライブ・パフォーマンスも人気の秘訣だ。収録されている6曲の内容は多岐ではあるが直球で、一貫したサウンド・コンセプトを感じる。彼らのルーツとなった1980年代から2000年代の音楽を現代風にアップデートし、いつの時代にも響いて色あせないことのない音楽的な魅力を持つ数曲の良曲ばかりで、後味も絶妙なので、気がつけばアルバムを何回もしてしまうし、プレイスのどのつとつとがくも響いていて、何度も聴いても新しい発見がある。“MAZE”という言葉を持つタイトルにも込められたメッセージを感じ始めながら楽しめる。レジェ・ミクスチャー・ナンサー「RUDE BOY」はSIMが大好きな人も必聴! KAORU

LABEL: Yumehika Records
GENRE: LOUDROCK
FOR FANS OF: Godpan,
Pay money To my Pain, the BONEZ